

教職大学院

Newsletter

No. 39

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2012.03.03

授業改善にかける板橋の熱い思い

東京都板橋区立赤塚第二中学校校長

稲葉 秀哉

本校は、現在、校舎の全面改築中です。工事完成後の平成25年度からは、新校舎での「教科センター方式」の授業が始まります。板橋区では初めての取り組みです。この「教科センター方式」への円滑な移行、そしてまた、「教科センター方式」を活用した授業改善を目指して、本校は「指導力向上特別研究指定校」として板橋区教育委員会より平成23・24・25年度の3年間の研究指定を受けながら研究実践を進めているところです。

また、区教育委員会と福井大学教職大学院のお計らいにより、本校と福井大学教職大学院との間で教育連携に関わる協定を結ぶことができました。これにより、本校は、福井大学教職大学院の拠点校となり、本校からは2人の教員を大学院に派遣するとともに、大学院からは教授・准教授の先生方が月に1回本校に来校されご指導いただくという、たいへん恵まれた幸せな環境の中で研究を進めることができている。

私たちの研究のメインテーマは「生徒の主体的な学びを重視した授業の工夫・改善」です。本年度は、特に「問題解決型の授業の工夫・改善」に主眼を置きました。

本年度は、何か大きな提言ができるまでにはいたっておりません。しかし、これまでの研究実践をとおして、改めて実感したことは、生徒が主体的に学習を続ける「原動力」となるのは、やはり、「生徒自らの内発的な学習の動機付け」であり、自ら感じとった「問題意識（課題意識）」であるということです。

私たちは、生徒に言語活動を行わせるときに、勝ち負けを競ったり、シールの数を競ったりするなどのゲーム的要素の高い言語活動を行わせるときがあります。また、「試験に出るからしっかり覚えなさい」というような指導をするときもあります。生徒はそのときは一生懸命勉強しますが、それ以外の時も学習意欲が持続するかという点必ずしもそうでもなかったりします。もちろん、そのような「外発的な動機付け」でも条件がそろえば「持続的な学習意欲」に結びつくときがあります。決して「外発的な動機付け」を否定するわけではありません。しかし、私たちは、まず、「内発的な学習の動機付け」に着目したのです。

私たちは、授業の導入時に、単元の内容やねらいに関わる生徒の「気付き」や「驚き」「疑問」「興味・関心」「憧れ」等の情動の高まりを起させるようさまざまな工夫をします。それは、生徒に「知りたい」

「作りたい」「話したい」「そうなりたい」等の知的な欲求をもたせ、その「課題の解決」（目標の達成）が「自己実現」につながることを生徒に気付かせたいからです。そして、そのためにはどのような解決の手順を踏んでいったらよいか、それを「問題意識」としてもたせ、学習に意欲的に取り組ませたいからです。

内発的な学習の動機付けは、強い学習意欲となり、学習を持続させる原動力となります。そしてそれは、最終的に生徒の自己実現につながります。授業改善のポイントはどこにあるのではないかと考えています。

私たちの「願う子どもの姿」の中に「つぶやく子ども」がありますが、それは、この「内発的な学習の動機付け」のことを言っているわけです。この場合の「つぶやく」というのは、学習のねらいの本質に関わる「問題意識」を、生徒自らがもった時に発する「声」や「思い」です。

そのような生徒の「思い」や「つぶやく」を起こさせるような授業にするにはどうしたらよいか、そしてそのようなつぶやくを取り掛かりとして、生徒が互いに関わりをもちながら主体的に学習に取り組めるような授業にするにはどうしたらよいか、継続的な授業改善に、今後も、努めてまいりたいと考えています。

内容

- 授業改善にかける板橋の熱い思い (1)
- 東京都板橋区立赤塚第二中学校研究集会報告 (2)
- 長期実践報告会を終えて (6) 連携校だより (8)
- 伊那市立伊那小学校研究集会参加報告 (12)
- 上海視察報告 (14) 福井大学ラウンドテーブル
- スプリングセッション案内 (15)

お詫びと訂正

教職大学院 Newsletter No.38の「教師教育ネットワーク・交流のひろば」の本文中に誤りがございました。

宇都宮大学大学院教育実践研究科
→宇都宮大学大学院教育学研究科

読者の皆さまならびに関係各位に深くお詫び申し上げますとともに、ここに訂正いたします。

東京都板橋区立赤塚第二中学校研究集会報告

公開授業・研究協議会を実施して ～研究実践から見たこと～

東京都板橋区立赤塚第二中学校

はじめに (副校長 小柴 憲一)

本年1月20日に開催いたしました公開授業・研究協議会は、本校の研究スタイル、研究の視点をお示するとともに、あらためて自分たちの研究についてまとめることが目的の1つでした。研究1年目の途中の報告にもかかわらず、当日は、区内外の教育関係者60名以上の参加をいただき深く感謝申し上げます。参加いただいた皆様からは、ご自身の学校の実践例、本校の今後の研究スタイルに関する評価など具体的なご意見もいただき、私たちの研究を振り返り、また展望をもつ絶好の機会とすることができました。

私たちは、教科や学年の枠を取り払った小グループを編成し、時間割に位置付けて相互に授業研究をしています。また、授業研究をする際には、子どもの様子を中心に観察し授業改善を図っております。年度当初は、研究を進めることに過度な負担を感じたり、授業を公開することに消極的になってしまったりするな

ど、スムーズな滑り出しとは言えませんでした。

しかし、福井大学教職大学院の先生方のご指導により、私たちの指導一つ一つに意味があることを知るとともに、「なぜ、今までそのように指導していたか」についてあらためて理解することができ、少しずつではありますが研究に対する意欲が高まり、今日に至っています。

今後は、内発的な学習の動機付けの原因を数多く見出し、帰納的な考えに基づき、個々の子どもの反応を予想したうえで、意図的に内発的な学習の動機付けを図る授業を実践していくことが目標です。特に、原因の中に潜んでいる本校の「隠れたカリキュラム」を顕在化することは、教科センター方式における環境づくりにおいて必要不可欠なことであるとの強い認識をもって取り組んでまいりたいと思います。

1 公開授業・研究協議会の実施 (スクールリーダー養成コース1年/岡部 誠・名地 太輔)

当日は雪にもかかわらず、多数の参観者に恵まれた。生徒会役員を中心とした生徒数名も受付・誘導を手伝い、熱気に満ちた公開授業が始まった。

実はこの研究協議会、本校にとっては久しぶりの開催とあって、当日が近づくにつれて教職員の気もみなぎってきたように感じる。「看板は手書きで」「研究授業前に、グループごとに授業内容を吟味しよう」「当日の参観申し込みが増えてきたぞ」などの声が聞こえてきた。私たちは当初、公開授業を実施するにはそれ相応の負担が生じるものなので、開催は難しいかなと考えていた。しかし本校の教職員は、「研究部の提案でやってみよう」との前向きな意見で後押ししてくれた。当日の研究授業者として申し出てくれた教職員も多数いて、大変恵まれた環境だと改めて感じた。

当日は、福井市立至民中学校や坂井市立丸岡南中学校の研究集会を参考にしながら、本校の研修スタイルで公開授業・研究協議会を実施した。特にこの1年間、分科会形式を重視してきた本校教職員にとって、大変有意義な1日となった。



▼参観者をにこやかに迎える生徒会役員



▼公開授業の会場を案内する学級委員



2 公開授業

英語科 (高橋 仁子)

この単元では「今まで習ってきた表現を使えるようになった」という実感を持たせるために、retelling (1年生の時に習ったlessonのpicture cardsを説明する)を目指した。公開授業ではその前段階として、グループで既に学習したスキットにナレーションを加え、工夫したものに再構成するという活動を実践した。生徒たちは予想以上に一人一人真剣に楽しく取り組んでいたと参観者から伺った。ただ習うだけの英語から使える英語への楽しさの実感が得られたのではないかと思う。今回の取り組みをさらに深化させ、次の授業につなげていきたい。

▼英語：スキットについて相談している場面



保健体育科 (澤本 聡)

「バスケットボールで問題解決型の授業」と聞くと、どのような活動を想像するだろうか？この問いかけこそが自分自身への挑戦と思い、研究授業に取り組んだ。当日の授業では、①互いにアドバイスし合いながら学習する→課題を発見する②学習カードを利用し主体的に活動する→出来た喜びを実感し次の目標を立てる、の2点を重視した授業を展開した。実践後は、「本日の授業が、本当に問題解決型の授業なのだろうか？」と自問したが、この疑問や自身の振り返りこそが省察につながるという話を聞き、日々授業を見つめ直している。生徒のはつらつとした活動は、次の授業へのエネルギーとなっていると改めて実感している。

▼保健体育：学習カードを活用している場面



社会科 (岡部 誠)

電子黒板の活用を通じて視覚的に学び、内発的な学習の動機付けを促しながら、多様な考えを引き出そうと意図した授業を実践した。参観者の「生徒が深く考える時間をもっと確保したほうが良い」というアドバイスを生かし、これ以後の実践で授業を再構築してみたところ、多様な展開が広がっていった。

▼社会：電子黒板で説明している場面



3 分科会

▼本校教職員の進行で行われた分科会の様子



公開授業の後、3会場に分かれて分科会を実施した。私たちはこの分科会が、本校の1年間の研修成果を問う試金石と考えていた。それは公開授業・研究協議会は、教職員全員の力量を発揮することで成立させたいと考えていたからだ。この分科会では、生徒の学びを話題とし、思い思いに研究主題について語る来校された先生方の姿と、それを支えるように、ファシリテーターとして分科会の進行をリードした本校の教職員の姿に大変感激した。活発な意見交換が行われた「全員参加型の分科会」は、しばらく赤二中の代名詞になっていきそうな予感がしている。

4 全体会

全体会ではまず、松木健一教授から「教科センター方式における授業研究の在り方を探る」と題し、ご講演をいただいた。中でも本校に即した話題をもとに「中学校における教科指導と生徒指導」の視点から、具体的な提案や方略についてお話を伺った。その後、石井恭子先生と木村優先生の3人によるシンポジウム形式の全体会は大変新鮮であり、特に研究授業の際の参観の要点を具体的に示していただくことになった。他校の参観者からは、「講師の先生のご指導、研究協議のあり方は、大いに参考になるものでした（近隣小学校教諭）」との回答に代表されるように、この有効な発表形式を今後も継続していく決意を固めた。

▼熱気に満ちた全体会の様子



5 教職員の声

次の研究発表会では、できればすべての学級を公開したい。今回、準備のお手伝いをしてくれた生徒も含めて研究授業に関わった生徒の表情からは、がんばっている姿を参観してもらうことに喜びを感じ、自信につながった様子が伝わってきた。教師と生徒で研究発表を実施している雰囲気がとても良かった。

(理科 名地 太輔)

外部に対して広く発信し、呼びかけたことの意義は大きく、特に分科会形式は、赤二中のグループ研究の姿勢が良く伝わったと思う。

(介添員 松本 恭子)

赤二中の考える『問題解決型の授業』と他校の参加者の先生方の『問題解決型の授業』の考え方にズレがあるような気がした。他校の先生方は『問題解決型』という形式にとらわれていたのではないだろうか。木村先生が、「生徒一人一人の授業中の姿に着目し、その生徒の具体的な学習の動きをとりあげながら協議を進めると良い」と講話されていたが、そのような視点で研究授業に参観してもらうことが十分に伝わっていると、より研究が深まると思う。

(美術科 大山 りみ)

寒い雪の日にもかかわらず、校種を問わずたくさんの方が来校され、教室からあふれるほどの参観者に驚いた。はりきって挙手する生徒、多くの人の目を意識し発言を控えてしまった生徒など様々だったが、グループの話し合いでは、活発に意見を述べ合っている本校生徒の姿が印象的だった。

(数学科 長尾 優子)

今年1年間実践してきた本校の校内研修の形を他校の先生方に体験してもらったことは、大変有意義だった。私自身も多数の先生方の考え方や視点に触れ、勉強になった。

(学習指導講師 相沢 航)

分科会でファシリテーター役を担った。「生徒間の協同的な学びで見られた、他者の異なる見方や考え方を話題とすると、参観者の方々からたくさんの意見をいただいた。「多様な考え方に触れることで自己の考察が新しいものに変化していった」や「個の学習の時間が深まらないうちにグループでの考察が始まったのが課題」など、活発な議論が展開された。異なる校種、立場の方々と過ごした分科会は、大変貴重な財産となった。

(理科 小谷野 美智子)

6 今後に向けて

本校では、毎年一人一人の教師の授業改善のために、全生徒を対象に授業アンケートを実施しています。そのアンケートの項目の1つに「授業中わからなかったことを、その場でまたは後で先生や友達に聞いて解決している」という質問があります。「はい」と答えた人の割合は、昨年度は62%でしたが、今年度は83%となり、20%以上増えています。何年かかってもなかなか上がらなかったこの数値が、初めて大きく変化しました。これはまさに、授業における「学び合い」の成果ではないでしょうか。本校では、一方的な教師

(教務主任 椿 正明)

主導の授業からの脱却を目指し、昨年度は「言語活動」、今年度は「問題解決型の授業」をテーマに、授業改善に取り組んでいます。このアンケートの数値の変化は、生徒の大きな変容の現れともいえるでしょう。今後の研究のテーマが変わっても「学び合い」を大切に授業を続けていけば、さらに成果が期待できると思います。また、授業で身についた生徒同士で問題を解決していこうとする力は、普段の学校生活の問題を生徒の力で改善できることにつながっていくと思います。

私が考える ～問題解決型の授業～

今年1年間の研究の成果や課題を1冊の冊子にまとめた。その中から、本校教職員が様々な立場で問題解決型の授業の工夫・改善に挑んだ生の声を紹介する。
(一部抜粋)

国語は話す聞く・読む・書く・言語知識の4観点から構成される学習活動である。例えば1つの教材を取り上げても本文を暗唱したり感想を書くというように、1つの学習材から多くの活動を引き出すことができる。よってその都度取り扱う教材に合せ、辞書引きや暗唱、主発問について考える活動を適宜組み替えながら授業を構成した。そして授業の最後に出題する「主発問を解決しようとする事」を目標に据え、問題を個人・全体で相互に解決する活動を取り入れた。

(国語科 本間 彩香)



目の前にある給食を教材にして活用し、食生活や食事のマナーを改善していく。授業の中に「食育」という科目はないので、学校生活のどの部分で「食育」を行っていくかが課題である。制約された環境の中、比較的配膳時間が短いランチルーム給食に着目し、問題解決の糸口を探った。食事前、あるいは食事中に3～5分指導を行うなど、給食だけに限らず、日々の食事に役立てていけるような食育を目指す。

(栄養士 小林 ちひろ)

今までの体育の授業は、生徒全員に同一の目標が示され、主としてその技能に達することを目指し取り組まれてきた。しかし、新しい教育課程ではこれが一変する。個に応じた教育を体育実技の分野でとらえると、今までは気かけられなかった、持って生まれた運動能力も大きな関わりをもって来る。相対評価では、この生得的条件自体が結果的に評価の対象となってきたといっても過言ではない。新しい体育教育では、個人の能力に応じた課題を設定し、その課題解決のために計画を立て、学び方を工夫することが学習の中心となる。問題解決型の学習の実践のためには、従来の方法にとらわれないことが大切である。

(保健体育科 関口 清臣)

某局の朝の連続テレビ小説、たった15分のドラマの中に、悩み考えさせ気づかせ、そして、落ちがある。実に次の放送が楽しみになる。そんな授業をしてみたい。1つの授業の中で、生徒が意欲的に学習すること

のできる瞬間を作っていくかが課題である。今回、生徒どうしが互いに教え合い学び合う場面の設定を中心として授業を実践していくことにした。

(数学科 峯 和歌子)

「社会的事象に関する基礎的・基本的な知識や概念、技能を確実に習得させ、それらを活用する力や課題を探究する力を育てる」「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育てる」この2点について授業を改善していくことが求められていると考える。そして言語活動を積極的に取り入れていくことが重要であると考え、次の4つの活動を取り入れていくよう授業を展開した。①各種の資料から必要な情報を集めて読み取る学習活動。②社会的事象の意味を考える学習活動。③社会的事象の特色や関連を説明する学習活動。④自分の考えをまとめたり、発表したりする学習活動。

(社会科 木下 和浩)



単なるドリル形式ではなく、相手から情報を得たり、互いに意見交換したりすることによって、実際の課題を解決しながら、言語活用能力の育成と定着を図る。今年度は、ペアまたはグループ活動等でのコミュニケーション活動を通して、個々の生徒が自分の学力に応じた課題に取り組んだ。①教科書の音読練習：ペアでそれぞれの役になって音読をしたり、相手の音読を聞き→互いにアドバイスをしたり、教え合ったりすることにより、全体の練習でも大きな声で発音できるようになり、会話らしく音読するようになった。②インフォメーションギャップ：自分が知っている情報を習った文型や単語を用いて相手に伝える→ペアの相手に「伝わった」そして、相手の情報が「理解できた」という充実感を味わうことができた。

(英語科 山下 彩子)

※詳細は平成23年度・研究集録にて掲載

長期実践報告会を終えて

2月12日（日）に長期実践報告会が開かれました。ここでは、当日の松木専攻長からの挨拶を採録するとともに、M1のメンバーにM2のメンバーの報告とグループディスカッションを振り返って考えたことを紹介してもらいます。

長期実践報告会の挨拶

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
松木 健一

みなさん早朝よりご苦労様です。本日はある意味、この2年間の最後の報告会ということになるかもしれません。この2年間、皆さんは自分を見つめ、他者に語りかけ、また自分を見つめる。そして、さらに学校全体にはたらきかける。そして、またまた同僚に語り自分を見つめ直す。そんな日々を過ごされてきたのではないかと思います。今日は、その最後ということになります。本当にご苦労様でした。

ところで、人間は言葉にできたことしか認識できないという生命体でもあります。しっかり両目を見開いて凝視し、身体全体で体感されたことであっても、言葉に置き換えられなければ、認識できないということでもあります。生活世界は言葉によって分節化されます。分節化されないものの前では黙さなければなりません。

ですから、身を引き割くような思いで、血がにじみ出るような思いで、言葉に紡いで来られたのではないかと思います。そうやって紡ぎだされた言葉は、認識のフレームをつくりだします。そのフレームができた瞬間、自分の視覚・聴覚が瞬時に組み立て直され、体験が再構造化されていきます。

そして、そのフレームは、明日のものを見る見方そのものであり、これから体験するであろう様々な経験

の収まる箱でもあります。したがって、皆さんは言葉化する活動を通して、ご自身の明日を創る作業をしておられたのではないかと思います。

皆さんの紡ぎだされた言葉は全てが完成品ではなく、おそらく文面には仮の言葉や偽りの言葉がまだ残されており、じっくりいかないと頭を抱えている方もおられるのだらうと思います。偽りの言葉はむなしいものです。自分の明日を創るフレームにはならず、喉元過ぎれば消えていく言葉だからです。また、仮りの言葉は、取りあえず仮設住宅で寒さを防ぎ、暖を取るのに似ています。いつか作り直さなければなりません。

私は最初、本日は言葉化する最後の日だと申しました。しかし、以上のことから言葉化する作業は終わることなく、生きている限り果てしなく続くこととなります。そしてそのことが重要なのだということを不幸にして気づいてしまったわけであり、もう抜け出すことはできません。ですから、本日は、これからの人生に向かって、自己のフレームの絶え間ない作り直しを宣言する記念すべき、最初の日なのだと思います。

記念すべき、そして底なしの沼に足を突っ込んだ最初の日を祝して、最初のご挨拶とさせていただきます。

教職専門性開発コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校インターン 西 洋平

今回の長期実践報告会は今までの合同カンファレンスとは違い、来年自分たちが向かっていく姿がはっきりと実感させられるものとなったように思います。特に森崎さんの発表では、自身がどのように迷いながら、どんなことを学んできたのかわかりやすくまとめられていました。さらには私が今まさに悩んでいることを森崎さんも悩んでいたということが書かれており、どのように考えていったのか読んで私の悩みの解決の糸口が見えていくのだらうという希望が持て、少し安心しました。具体的には参観記録の取り方の変容が印象に残っています。私の参観記録は、未だにメンターの先生がどうやって授業を進めていくかその方法にばかり目がいってしまい、どんな発問をして進めていったか、そこで生徒はどんな発言をしたのかという記録だけになっており、これだけでは後で記録を見返した時に見にくく、どんな授業だったのかが全然伝わってこないと感じています。しかしそうは感じ

ていても具体的にどうすればいいのはわからずにいました。そんな中で、森崎さんも同じように悩み(報告書の中では森崎さんがこの点で悩んでいたのは5、6月のようですが…)、自分なりの答えを出していったことを今回の報告で知り、森崎さんも同じことについて悩んでいたんだなという安心感がありました。それと同時に、これからの考えていく視点の例を示していただき、ステップアップするための良い足がかりとなったように思います。この報告の後メンターの先生と話す機会があり、そこで言われたのは「授業者がどんな意図で発問しているのか」といった背景を探っていくとよいというものでした。今はまだ参観(観察)でしかありませんが、そういう視点でみることができると深いところまで考えられるようになります。インターンも残りわずかですが、この視点を大切に参観していきたいです。

長期実践記録として自分の学びを捉え直し、また学

んでいく。同じテーブルにいらっしやった山下先生は、「生涯学び続けるそのスタート地点に今立っていて、それに気付いてしまったが幸か不幸か、一生学び続けることになるんだね。」と笑いを交えて話されていました。この言葉に私は確かにそうだと思ったのです。学んでいるときは楽しくもありますが、同時に苦しみでもあるように思います。しかし、1つのサイクル

が終わって考え直してみるとやはり面白いのです。そう思うと、長期実践報告書は1つの通過点で先へつなげるものへとしていく必要があることを強く思いました。とりあえずは、その前段階となるM1のまとめとしての長期インターンシップ報告書の作成を頑張りたいと思います。

スクールリーダー養成コース1年／越前市武生第一中学校 澤崎 秀之

この日は2つの長期実践を聞かせていただいた。会の初めに松木先生から、報告される先生方が忙しい日々の中で血のにじむような・・・のご挨拶があった。その一言を耳にして、自分のこの1年間をふと振り返ってみた。学校に勤務しながら、研究のフィールドを学校現場に置きつつ、より現実的な研究と実践を練り上げていく1年間。長期実践報告をされた先生方は2年間もの、より密度の濃い日々を過ごされたのだろうと推察できた。自分が実践してみて分かる密度の濃さ。大変ではあるものの、実践の傍らには常に生徒の存在や同僚の存在があり、机上の空論ではなく血の通った実践であることが充実感にも繋がる。長期実践を報告される先生方の分厚い報告書が一段とずっしりと手に伝わってくる日であった。

私はお二人の実践を聞かせていただいたので、感想を交えてその内容を振り返らせていただく。

ストレートマスターの内田真希さんの実践は、『子どもとの関わりから教師としての自己を確立する』であった。内田さんが教師を目指していくうえで、描いていた教師像が自分にとってどんな意味を持つのかを学校現場の実践の中から模索し、そのストーリーを詳細に報告していただいた。探究ネットワークの活動を通して“子どもに寄り添う教師”とは何かを本当に細かく省察されていた。子どもの成長の芽を摘まないような関わり方、記録をとることの意味、記録のための授業参観から脱却し子どもを見取ることの本当の意味、子どもを見取ることが授業実践にどう生かされていくのか、教師として受信することから言葉で発信することへの進化、3つのこと(学年というイメージ・自主性という言葉・やっぴこと然という考え)にとらわれていたことへの気づき、内田さんのストーリーが紡がれていく様が自己の葛藤と共に、実に丁寧にとらめられていた。今までの概念や感覚として持っていた“子どもに寄り添う”と言う言葉が、実践を通して具体的な場面(例えば授業での寄り添い、子どもの心への寄り添い、活動設定における寄り添いなど)での“寄り添い”に変化していく様が、私自身の体験とともに思い起こされた。一般的に簡単に言葉として発せられる言葉(例えば、子どもを見守る?子どもの自主性を育てる?子どもに寄り添う?優しさ?などの言葉が本当はどんな意味を持つのかは一人一人の教師にとって違うものであるのが現実)が、教師像を考える実践の中で、自分のものとして確立されていく様は素晴らしく、綴られている言葉に誠実さと力があり、その様を見ていない私にも切々と伝わるものがあつた。こんなにも深く自己を振り返る機会はなかなかない。この2年間の貴重さがひしひしと伝わってきた。

スクールリーダーの渡邊先生の実践は教職大学院の

拠点校でもある丸岡南中学校で、研究主任として先生方の協働体制を構築されていく様が渡邊先生自身の言葉で細かく報告された。研究体制を構築していく際のキーワードとして、“教科を超えた教職員の協働”を掲げられ実践に取り組んだ様を伝えていただいた。教員のモチベーションアップや時間の効率化など、中学校が抱える諸問題を正面からとらえられ、どんな段階を踏んで「学校の空気」が出来上がってきたのかを丁寧に説明していただいた。学校の協働を育む際に研究主任としてどんなビジョンを描くのか、葛藤された様子が何度も省察されて、そして渡邊先生の言葉として描かれていた。「スクラップ&ビルド」という考え方を本当にどう取り組んだのか。研究に取り組む際の「コンセプト」をどう設定したのか。中学校に勤務する私自身にとってもたいへん興味と関心のある実践であった。ただ、報告書の中にも綴られていたが、同じことを同じ手法で自分の学校でやっても成功するとは限らないところが、教育の難しさであり可能性の広がりでもある。学ぶとは真似をすることであるからよいのだが、自分の学校にあわせて変えていかないといけない。そのまま同じことをやっても上手くいくはずがない。本当にそうであると、私自身も痛感している。丸岡南中という新しい学校で、1年目の取り組みは教室が近い教科の協働を構築するという発想から、2年目の、領域を考えた協働に変化していく様子は説得力があり、まさに教科を超えた協働を構築していく様子が分かりやすく伝わってきた。まさに地に足が着いた実践であった。

当日の報告会では同席させていただいた巨田先生から、「教員が1つになれる媒体とは?(地域や風土に応じたものは一体何なのか?)」という言葉を聴き、夏季集中で読んだ斎藤喜博先生の「学校づくりの記」の内容が思い起こされた。こんなにも文化が進んだ現代なのに通じるものが同じであることに新鮮な感動を覚えた。また、笹原先生から「いい学校は組織が生き物なんですわね!」と発せられた言葉は今日の長期実践報告会で得た要の言葉にもなった。自分が自分の学校で実践に取り組んでいるからこそ、自分のストーリーを作り上げている今だからこそ、報告会に参加させていただいた自分に価値が見出せた瞬間であった。自分の1年目の振り返りをしっかりしなくてはと、心に留めた1日であった。

スクールリーダー養成コース1年／鯖江市立待小学校 岩堀 美雪

2月12日(日)に行われた長期実践報告会では、2年生の方々の報告をお聞きしました。1人目は、特別支援学校で男子児童と関わった2年間の記録でした。聞きながら、1人の児童とじっくり向き合うことの大切さとすばらしさを教えていただきました。私は現在28名のクラスを担任していますが、発表の初めの方では1人の児童とじっくり向き合えることがうらやましいなあと感じていました。と同時に、普通学級ではなかなかそこまでできないなあと考えている自分がいました。そんなことを考えながら聞いているうちに、次第に話題の中心になっている男子児童が自分のクラスの1人の男子児童と重なってきました。そして、60分間の発表の間中彼のことが頭を離れませんでした。彼も給食の好き嫌いの大変激しい子です。「4月の頃はおかずは全く食べられなかったなあ」「野菜のお浸しを吐きそうになりながらも食べたこともあったなあ」「初めて給食を完食したときはうれしかったなあ」「今もまだ残すことは多いけど、それでも4月から比べると少しは食べられるようになってきたなあ」等々。そんなことを考え出すと、次第にもっと彼のためにできたこと(給食だけでなく学習指導も含めて)があったかもしれないと思えてきました。「普通学級では人数が多いからなかなかそこまでできないなあ。」とできない理由を挙げていた自分に気付きました。今後は一人一人と向き合う視点を今以上に心がけていきたいと思いました。

2人目は、スクールリーダー養成コースの方の実践でした。まず、冒頭の「学校は勉強だけを教える所ではない。人と人が支え合って、協力し合い、解決していく所でもある。そのような経験をさせたい。勉強も大切だが、人間としてもっとも大切な人間力を高めていける教師でありたい。」という個所を読み、とても共感しました。その後の新採用から今日までの記録の中には、失敗談もありました。自分にも心当たりが多々あり、「うんうん、分かる分かるその気持ち。」と共感しながら聞かせていただきました。また、失敗しながらも、何かよいものはないかと常に模索し、行動を起こし、挑戦し続ける姿は大変すばらしいと感じました。授業研究のあり方も、教職大学院で学んだことを生かして「子どもを中心にみる」ことを実践されていました。この視点は現在の勤務校では取り入れられていないので、来年度はぜひ取り入れていきたいと思いました。

このようにお2人の発表から多くのことを気付かせていただきました。来年は自分がこの場で発表するのだと思うと、身の引き締まる思いです。あと1年。長く感じるか短く感じるか、どちらにしても自分次第。残りの1年間さらに研鑽を重ね研究を深めていきたいです。そして、来年の発表の日にはこのお2人のように堂々と発表したいと思いました。

連携校 だより

福井県立坂井農業高等学校

スクールリーダー養成コース1年
森 克彦

坂井農業高校の森です。現在3年の担任をしていますが、自由登校になり何か物足りなさを感じています。「拠点校・連携校だより」ということで本校の紹介をしたいと思います。

本校は、福井県の北東部に位置する坂井平野の中心にある高校で、JR北陸線丸岡駅下車徒歩5分と非常に交通の便に恵まれています。1917年(大正6年)創設の「坂井郡立農学校」を前身とし、現在の山室農場は、松平春嶽(第16代越前福井藩主)の孫で、松平康荘が民間の農業研究拠点として創設した松平試農場を受け継いだもので、非常に歴史と伝統のある農業高校です。現在、幾多の変遷を経て、生産技術科、食品科、環境システム科の3学科が設置されています。学校の生徒数は260名弱と小規模ですが、教員全体が生徒把握をすることが可能で、個々に応じた教育を行っています。また、生徒一人ひとりを大切にす教育を目指し、取り組んでいます。



各学科とも専門コース2つと、教養コース1つの3つのコースを設け、特徴ある教育内容を厳選し、時代に選れないような内容を取りそろえています。

【生産技術科】

目標 生命体を理解するとともに、食料に関する知識と技術を習得し、農業の技術者・経営者及び関連産業に従事する者として必要な能力と態度を育てる。

コースの目標と学習内容

- 農業コース 作物・畜産に関する知識と技術を深める。
- 園芸コース 野菜・草花・果樹に関する知識と技術を深める。
- 教養コース 大学・短大進学のための学習を深める。



山室実習（甘藷の除草作業）



育雛実習

【食品科】

目標 食品の加工や流通に関する知識と技術を習得し、豊かな創造力と科学的態度を養い、地域の食品関連産業に従事する者を育成する。

コースの目標と学習内容

- 加工コース 食品の製造・分析・栄養などに関する知識と技術を深める。
- 流通コース 食品の販売・取引などに関する知識と技術を深める。
- 教養コース 大学・短大進学のための学習を深める。



イチゴジャム実習

【環境システム科】

目標 生産基盤や地域環境の整備に関する知識と技術を習得させ、環境工学に関する業務に従事する技術者として必要な能力と態度を育てる。

コースの目標と学習内容

- 建設システムコース 建設機械の運転操作の習得や施工材料や施工方法の理解を中心として、建設工事に関する施工技術の学習を深める。
- 環境デザインコース 人間活動によって失われた水田地帯の生態系を回復する手法や、コンピュータを利用した計画や設計の学習を深める。
- 教養コース 大学・短大進学のための学習を深める。



建設機械実習操作



地域生物調査

以上が、それぞれの学科の目標と学習内容です。本校は、地域連携、地域交流事業では小学校や養護学校と活発に交流し、生徒が先生役になることで自信を深めています。

近隣の小学校との交流事業として、生産技術科の水稲栽培や野菜栽培、食品科のジャム作りなど、また環境システム科の土木施工技術者試験の合格、地域農業サポート事業などが新聞記事として取り上げられ、地域の農業高校としての存在、生徒の意識の高揚にもなっています。また部活動も活発にやっています。

以上、坂井農業高校のことを紹介しました。今後ともよろしくご指導ください。

福井県立嶺南東養護学校

スクールリーダー養成コース1年
伊藤 ゆかり

嶺南東養護学校は、南校舎は若狭町、体育館や事務室が美浜町と、2つの町にまたがる小高い丘に建っています。眼下には、三方五湖が眺められ、西には県立美方高校、南にはレイクヒルズ美方病院が隣接しています。

本校は、前身、肢体不自由養護学校であった美方養護学校と知的障害養護学校であった嶺南養護学校が統合され、隣接の校舎同士を廊下で繋ぎ、平成10年に開校した総合養護学校です。

知的障害・病弱・肢体不自由など障害が違っても、同じ学校の中で、互いに関わり合いながら、生活しています。本校は、幼稚部1名、小学部44名、中学部30名、高等部35名、訪問部4名の合計114名、教職員は100名を超えるにぎやかな学校です。本校には寄宿舎が設置されており、集団生活を通して様々な経験をすることで、心身の育成を行っています。洗濯や入浴など基本的生活習慣を学ぶとともに、余暇の過ごし方を探る場所にもなっています。

校区は、旧三方町から敦賀市までと広く、通学方法はスクールバスの「さんさん号」、委託バスの「かいりく号」での通学が多数ですが、高等部ではJRやバスを利用して自主通学している生徒、寄宿舎生は、「敦賀市の親の会」の要請で運行している「敦賀市からのバス」を利用している生徒など様々です。また、児童生徒の家庭に向向いて行う家庭訪問学級と、国立病院機構福井病院へ向向いて行う施設訪問学級の訪問教育もあります。

いろいろな障害のある幼児・児童・生徒の障害の状態や特性に応じた教育を行うため、一人一人の実態を

正確に把握し、ICFの理念に基づいて個別の指導計画をたてて教育実践をしています。個別の指導計画とは、将来を支援するために学校教育で行うことを、長期的・短期的に目標を立てて家庭と連携しながら実践していくためのものです。保護者の方からの願いや考えを伺いながら立案し、幼稚部から高等部まで、それぞれの発達段階に応じて、各学部の特徴を活かしながら一貫した教育を行っています。

他に本校でも、年間を通じて、体育大会・学校祭・修学旅行などさまざまな行事があります。部活動としては、体育的・文化的活動を中学部・高等部生が放課後に行っています。

高等部生は、生徒の能力、特性に応じて一般企業・福祉施設などを進路選択し、今年度も3月15日に巣立っていきます。

このように一人ひとりを大事に「笑顔があふれる学校」を目指しています。



作業学習



教科学習



学校祭



生活単元学習



修学旅行

福井県立勝山南高等学校

スクールリーダー養成コース1年
堂森 峰春

福井県立勝山南高等学校は学科再編により、平成元年に開校した全日制の専門高校です。前身は、定時制の福井県立勝山精華高等学校ですが、学校創立は、昭和17年、地元の繊維工場で働く若者のために建てられた定時制の私立勝山精華高等女学校です。

現在は、商業系学科の「情報科」、 「経営実務科」、 家庭系学科の「生活経営科」が設置されています。これまで8,000人余りの卒業生を送り出してきましたが、平成20年3月に出された「福井県高等学校再編整備計画」によって平成24年度をもって70年の歴史を閉じることになりました。現在は、2年生と3年生、123名が在籍しています。そのほとんどが、地元奥越出身で、進路先も大半が地元でありますので「地元で役立つ人材育成」が本校の役割と考えています。

生徒数は少なくなりますが、すべての生徒が「この学校に入学してよかった」と言って卒業できるよう、様々な活動に取り組んでいます。

授業は、約7割がTTまたは少人数による授業になっており、多様な学力と進路をもつ生徒に対応できるようにしています。どの授業でも、基礎的・基本的内容の習得を目指して学習計画を立てています。授業後に教師同士が授業や生徒の理解状況について話あったり、教科を超えて生徒について情報交換したりする姿が職員室でよく見られます。生徒数が少ない分、すべての教員がすべての生徒を知っていることが本校の強みであると思います。今年度は、教員の授業力向上をめざして、11月上旬に公開授業週間が設けられました。お互いに授業を参観し合い、感想や意見を交換し合いました。前後しますが、6月には初任者研修のための公開授業と授業研究会が行われ、授業をした私たちも改めて自分の授業を見直す契機となった年でした。今後も教科間の連携や他教科の授業参観などの取り組みを広げていければと考えています。

商業科の授業では、これまでの情報処理や簿記等の学習に加えて、近年はデザインの学習に取り組んでいます。毎年、学校祭のポスターは生徒がデザインしています。その他、缶バッジや白川静先生が研究された篆書体の漢字をデザインしたタオル製作などにも取り組んでいます。家庭科の授業でも、調理の学習に加え、被服製作にも積極的に取り組んでいます。3年生になるとドレスを制作し、作品を学校祭のステージで発表することが、生徒の大きな目標となっています。

学校行事や生徒会の活動は保護者の方や地域との連



携を強めるようにしており、授業の中で学んだ技術や製作した作品を地域イベント等で積極的に発表するなど、校外の力とつながることで学力向上に努めています。今年度は、勝山市と大野市で開かれたイベント

で、商業系の生徒はオリジナル缶バッジの販売を、また生活経営科の生徒はファッションショーを披露しました。商品の販売等を通じて、直接地域の方から励ましの声をかけていただき、生徒の励みになっているようです。



学校祭では保護者の方々に支援していただいています。これまでも「もちつき」や「うどん」の提供をしていただきましたが、特に今年度は、トランポリンのナショナルチーム強化指定選手を招待していただき、素晴らしい模範演技を見せていただくことができました。また、ステージ発表でも保護者と教職員による合唱を発表しました。体育祭でも、保護者と教職員が対抗する種目を実施でき、例年以上ににぎやかな学校祭となったと思います。

11月には毎年、弁天河原の除草作業を全校生で取り組んでいます。事前に環境美化の啓発活動を地元のショッピングセンター前で行うのですが、その際には勝山市役所からも職員の方が応援に来てくださったり、当日には地域住民の方が協力してくださったりしています。「勝山南高校の生徒、がんばってるな」と声をかけていただくことも増えてきました。

生徒会ではこのような声にこれまで以上に応えていくため、「勝山南閉校プロジェクト 紡(つむぎ)」を実施しています。これまで勝山南高校を支えてくださった多くの方々の思い、現在、本校で学ぶ生徒の思いをよりあわせて、温かい人々の交流を紡ぐことができるとの思いからです。芥川賞作家の津村節子先生が作詞してくださった本校の校歌にある「あたたかき人のふれあい、豊かなる心を紡ぐ」という一節からとらせていただきました。

来年度は1学年だけとなりますが、生徒の有意義な活動を支えていける教員集団の形成を目指し、教職員大学での学びを生かしていきたいと考えています。

伊那市立伊那小学校研究集会参加報告

長野県伊那市立伊那小学校に行ってきました！！

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
森 透

去る2月4日(土)に長野県伊那市立伊那小学校の平成23年度公開学習指導研究会があり、総勢9名で参加して来ました。前日の3日夜に車2台で大学を出発し夜遅く伊那インター近くのホテルに到着しました。伊那市は雪はほとんどないのですが、晴れていて氷点下になるとも寒い地域です。星がとてもきれいでした。翌日の公開研究集会は全国から800名近い参加者であったでしょうか。全体会の体育館が参加者でいっぱいでした。私はここ20年くらい大体毎年参加していますが、総合学習が注目を集めている現在、改めて参加者が増えてきたのではないかと思います。一緒に参加した先生方と院生は初めての方ばかりで、動物(家畜等)を飼う実践で有名な伊那小学校に一度は参観したいと言われていました。朝は毎年全部の教室を公開して「自由参観授業」を行い、それから体育館での全体会で研究主任による研究発表(テーマは「内から育つ」ー学びの道筋をたどり直しながら、自らを高めていく子どもー)、その後の「共同参観授業」は1年から6年までの代表クラス1つずつと特別支援学級2クラスの総合学習・総合活動の提案授業でした。午後は共同参観授業に関する分科会、そして全体会での学習発表・シンポジウムでした。毎年2クラスの子どもたちが1年間のクラスの総合実践の歩みを歌や劇で表現するのですが、本当にいつも感動させられます。最後のシンポジウムは歴代の研究主任の先生方が4名シンポジストで

した。昭和54年-56年度の研究主任の大槻武治先生は1983年にNHKで放送された「ポチのいる教室」の先生ですが、80歳近い年齢にもかかわらず、伊那小の精神をしっかりとお話になっておられました。大槻先生のお元気な姿に接することが出来て、伊那小の歴史を改めて感じる事が出来ました。伊那小が30年ぶりに本を出版しました。『共に学び共に生きる ①・②』(2冊本、本体2800円、信州教育出版社、2012.2)。①が「伊那小教育の軌跡」、②が「伊那小教師の物語」です。是非多くの方々がお読みくださるよう。おすすめめします。

伊那小学校30年間の歩み、そして現在——
共に学び共に生きる ①・②
①伊那小教育の軌跡 伊那市立伊那小学校 編著 / 福井大学教育学部 編
②伊那小教師の物語 伊那市立伊那小学校 編著 / 福井大学教育学部 編

およそ30年前 伊那小総合学習の黎明期を著した本
「内から育つ」から「自ら学ぶ」のオンパレードを収録
「自ら学ぶ」は、教科書準拠の
小学校低学年における総合学習の実践

信州教育出版社 信州教育出版部 020-2511098
FAXフリーダイヤル 0120-25-1098

| 学校種別 | 注文書名 | 2冊セット | 送料 | 代金引当 | 備考 |
|--------|--------------|-------|------|-------|----|
| 小学校 | 共に学び共に生きる①・② | 2冊 | 200円 | 1000円 | |
| 中学校 | | | | | |
| 高等学校 | | | | | |
| 特別支援学校 | | | | | |
| その他 | | | | | |

子どもの能動的な学びについてさらに強く考え直す

教職専門性開発コース1年/福井大学教育地域科学部附属小学校インターン
小島 俊祐

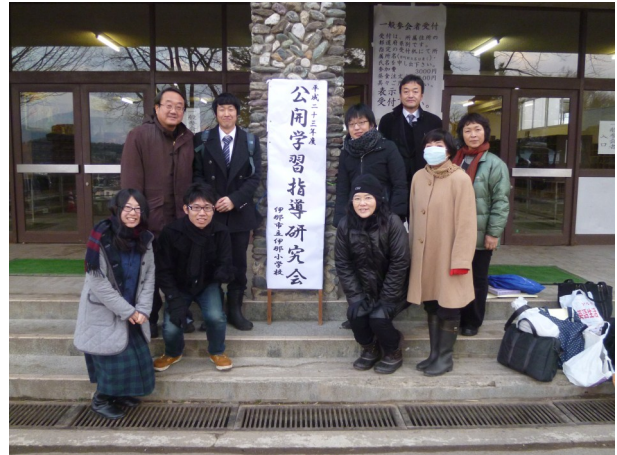
念願の伊那小学校の公開学習指導研究会に参加した。学校に着いて受付を済ませると、普段の伊那小学校の風景なのだろうが、さっそく驚かされた。中庭に通じる入り口がある廊下の近くにいと子どもたちの声と一緒に目の前をなにかが通り過ぎた。1年生の子どもたちと羊である。

私は引き寄せられるように1年生の「ひつじさんといっしょ(総合学習)」の授業を参観することに決めた。中庭にて行われる授業で、教師の「今日はなにをしますか。」という発問から、授業が始まる。子どもは、遊び場づくりをする、餌になるだろうと考えて貰った植物を植えるなどを口々に発表していて、学習計画や本時の流れは知らずに参観したが、活動の見通しを持っている児童が多い印象を受けた。子どもたちは気になることがあるとすぐにそれを確認したくなる

ようだ。教師が「めやちゃん、(羊の名前)その草食べるのかな」と聞くと、めやちゃんの周りに多くの子が集まり、実際に食べさせようとする。食べたよーとつぶやきが広がり、満足して最初に話を聞いていた位置に子どもたちが戻ってきた。その間、教師は戻っておいでもとも言わずに黙って見守っていた。この場面からも普段の子どもの学びの様子や、教師のかかわり方を垣間見た気がした。思う存分に気になったことを探究できる学びや時間を教師が普段から保障しているのだと感じた。

授業の中でもそのような子どもの姿を見ることが出来た。活動の開始の合図と同時に子どもたちは自分の担当の場所に集まり活動を始めた。誰も関係ないことをして遊んだり、ふざけたりする子はいない。教師の余計な指導や注意もない。活動に夢中になる子どもは

活動に関係ない話をやめて、自然と口数も少なくなっていく。私は【危ないところに行かないように柵をつくらう】チームの子どもの姿を追うことにした。その中で、印象的な場面があった。一度、打ち付けた釘が曲がっていたので、ある男の子はその釘を抜こうとする。しかし、釘抜きを使ったことがないのかしばらく使い方に悩んでいるようだった。「これってさ、引っ張ればいいのかね。」するとその場にいた別の子が「とりあえず、やってみたら？」と声をかけ励ました。「そうだね。」と釘抜きに挑戦し始める。しかし、まっすぐ力づくに抜こうとするがうまくいかない。しばらくして、男の子は子どもたちの中でも釘抜きで一目置かれているのであろう釘抜き名人の男の子に、「どうやったら抜けるの？」と尋ねる。すると釘抜き名人は代わりにやってあげようとするのだが、「僕がやるからやり方だけ教えて」と言う。ここで少しもめるのだが、釘抜き名人はジェスチャーを用いて、経験からの知恵なのか“てこの力”を利用した使い方を教える。この場面の子ども同士の間には一切、教師はかかわっていなかった。それでも、わからないことに出会ったときに教師に聞くのではなく、自分たちの力でまずやってみようとして挑戦できたこと、その挑戦をさりげなく支えた友達の言葉かけ、釘抜き名人のように自分もなりたいと思う憧れとこだわり、釘抜き名人の技能の教授など子どもたちが主役である学びがそこにはあった。子どもたちの力でここまで活動できるようになるまでには、教師の支えが当然あったのだろうが、子どもたちが主人公である、生き生きとしたダイナミックな学びの姿に力強さを感じた。また、共通して子どもたちからめやちゃんを思う気持ちが伝わってきて、みんなの目的意識はめやちゃんのための活動としてつながっている印象を受けた。めや



ちゃんとかかわりから、道具へのかかわり、友達とかかわりと広がり、対象と向き合い、そして自分と向き合いながら、自らを高めようとする学びがそこにはあった気がした。

私の心は揺さぶられた感覚だった。自分の授業実践と比較すると私はまだまだ自分の枠内での子どもの主体性にとどめている気がした。子どもの求めに注目し、子どものエネルギーを活かすことができる教師に私もなりたい。そんなことを考えさせられた伊那小学校の実践であった。最後に学校長の挨拶を紹介したい。「見るべき施設もない、カリスマ教師などいない、ただ真の教育があると言われる学校でありたいと願っています。」伊那小学校の実践は私に教育とはなにか原点に戻って考えさせる機会をくれた。生き生きとした子どもの姿と子どもの成長を心から願う教師集団への出会いに私は心から勇気づけられた。

伊那小学校公開学習指導研究会に参加して

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校インターン
佐々木 庸介

伊那小学校の授業に参観してまず驚いたことは目の前に羊が通っていったことです。するとその羊を囲んで1年生の児童も一緒に中庭へと歩いて行きました。私は「何が始まるのだろう」と興味津々にその後を追っていきました。すると児童が「羊さんのために」とグループに分かれて柵を作ったり、餌となる草を植えたり、糞を埋める穴を作ったりという活動が始まりました。

この活動中、私は柵を作るグループの児童3人の様子をみていました。児童たちは役割分担によって重たい木材を運び、黙々と作業を始めました。どの児童も真剣に活動に取り組んでおり、羊のために活動しようという気持ちが非常に強く伝わってきました。Aさんが金槌を持って釘を打ち、それを隣で眺めるもう一人のBさんが「金槌の下の方を持った方がいいよ」とアドバイスをしました。そしてCくんは木の板を持ってAさんが釘を打つのを黙って見守っていました。釘打ちが終わるとCくんは「できた？」と声をかけ、仕上がりを確認していました。活動を行う際に、目標を共有し、自然と自己の役割を認識しながら協働が自然に行われており、児童同士がかかわり合いながら学び合う

姿をみることができました。児童の協働がとても高次なものに感じました。

研究発表では、このような協働を支えるために、先生方は子どもの様子をみとり、それを他の先生と共有し合いながら、先生方も協働していることが分かりました。児童の記録や行動からその児童の思考の流れを把握し、それを言語化して考えていくという研究が伊那小学校では行われていました。私は研究発表で語られる子どものみとりを聴きながら自己の実践と照らし合わせることで、日頃の授業の学びを再構築することができました。これは、伊那小学校の先生方が、子どもたちと現実の難題に立ち向かい、共に危機を乗り越えていく中で、悩み続けた過程を伝えて下さったからこそできたのだと思います。

ここで、自己の実践と照らし合わせたことを記したいと思います。私は至民中学校インターンシップでの授業において、生徒と共に協働し、探究していくような授業を目指してきました。生徒共に授業をつくっていくことが非常に楽しかったのですが、授業が進むにつれて私が考える授業の筋と生徒の学びの筋がずれていくような感覚がありました。これは、私が「生徒に

教えなければならない」と無理に生徒の学びの筋をずらし、教科書に書いてある内容を教えようとしたからでした。このズレを解消するために私はどのように考えていくべきか迷っていました。伊那小学校の研究発表を聴いて、「私と生徒が『教える－教えられる』の関係ではなく、『共に学び合う』関係で授業を進めていくことがズレを解消するために有効なのではない

か」と考えるようになりました。伊那小学校で行われている実践のように、日々の授業を生徒と協働探究していくことが今後の私の課題となりました。このように、私は伊那小学校の実践を見ることで自己の省察が行われ、新たな視点が生まれました。これからも他校の研究会に参加し、自己の学びを深めていきたいと思

上海視察報告

秩序なき競争社会の中から生み出されるアグレッシブな教育改革

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
川上 純朗

上海における教師教育改革や小中学校等での学力向上の取組についての視察を目的として、上海師範大学及び附属学校を訪問し、上海の教育事情を肌で感じる機会を得た。10月20日から3泊4日という強行スケジュールだったが、これまでの福井大学教育地域学部と上海師範大学との交流実績や福井大学副学長、寺岡氏と上海師範大学書記、陸氏との厚い信頼関係により、上海側の献身的とも言えるバックアップを受け、内容の濃い視察とすることができた。この視察で学んだことの一部を報告する。

1 上海師範大学

2日間にわたってソウ副学長、陸書記をはじめとする上海師範大学の経営陣と懇談する機会を得た。紙面の関係で詳細は記述できないが、特に印象深い言葉として「師範教育は医師養成と同じで実践科学たるべき」が挙げられる。上海師範大学と名乗っているが、現在では師範コースの学生数は全体の約4分の1にしか過ぎない。しかも、師範教育自体、他大学の参入もあって、その中で生き残るためには、現場で即戦力となる教師を育成することが必須となっている。人口約2,300万人の上海においては、すべての分野で「秩序なき競争」が繰り返されており、大学も、社会ニーズに応じて、カリキュラムのみならず、学科・コースを常に最新のものにしていくことが求められている。例えばそれが過去の成功体験であったとしても、現状に留まることは許されない厳しい競争社会の中あり、教育に関しても同じ競争原理の中で生き残りを掛け、日々リニューアルしていかざるを得ない状況である。このアグレッシブな教育改革のエネルギーが、2009年PISA学力調査結果で上海が世界一となった要因の一つであろうと感じた。

2 上海市教師教育基地

今回、最も視察したかった施設である。上海師範大学の中に上海市教師教育基地（日本における「教員研修センター」のように、現職教員が研修する施設）がどのように位置付けられているのか。今回の視察の最大の関心事であった。日本における教員養成と教員研修は、これまで、大学と教育委員会とで分担して行ってきたが、有機的な連携ができていたかと言うと十分

であったとはとても言えないのが現状である。そして、その反省があっても、お互いの文化の違いを乗り越えられず、連携は遅々として進んでいない。しかし、なぜ上海では可能なのか？これには、中国と日本の政治体制の違いが関係していた。上海市は、中国の直轄市の一つで中央政府が管轄している。したがって、上海教育委員会は、中国政府の教育方針を具現化するための行政機関であり、その支配下には大学も含む。大学は、上海市教育委員会の方針に沿って運営されており、養成と研修は大学を舞台に一貫して行われるのである。上海教師教育基地のスタッフの中心は、上海師範大学の教員であることもある意味当然である。逆に、大学生の教育実習も学校現場と一体となっており、実践を重視する大学の評価の場にもなっている。

3 上海師範大学附属実験学校

学校現場を視察したいという要望が通り、上海師範大学附属である小中一貫の実験学校を視察することができた。小学校1年生から英語教育を実施するなど、必要だと判断されたことはすぐに実践に繋げるといった改革の早さには舌を巻く。政治体制の違いがあるとは言え、改革のスピードは尋常ではなく、少なくとも上海には、先進国と肩を並べ、一気に抜き去る勢いがある。



陸書記との懇談風景(上海師範大学)

4 まとめ

教育委員会と大学とが、お互いの文化や体制の違いを超えて協働し、時代に即した学校文化や教員文化を支える支援体制をどのように構築していくか。今、国が教員免許制度の抜本的な見直しを進める中で、避けて通れない課題である。養成から研修に至るすべてのライフステージで教員の成長を支えるシステムが構築できれば、常に学び続ける教員文化として学校改革を支える柱になるはずである。実現している上海のモデ

ルは参考にはならなかったが、教育委員会と大学とが、目的を同じくして教師や教育内容の質を高めていこうとする強い意思を感じた。文化や体制の違いを超えるのは、相互交流によって培っていく共通の意思と何より人同士の信頼関係である。福井県教育委員会と福井大学とは、全国で最もそれに近い位置にあるのではないか。更に連携・協働を進め、養成と研修が一体となった福井モデルを構築し、全国に発信していければ、視察を終えてそのように感じた。

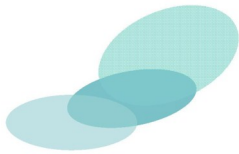
Fukui Round Tables: Spring Sessions 2012 for Reflective Practice, Organizational Learning, and Reflective Institutions

実践し 省察する コミュニティ

For Communities of Practice and Reflection

2012.3.3-4
福井大学教育地域科学部 1号館

主催: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)
後援: 福井県教育委員会・(財)福井観光コンベンション協会
共催: 福井大学高等教育推進センター・教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム・福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」



2012年3月3日(土)、4日(日)の2日間に渡り、福井大学ラウンドテーブル スプリングセッションが開催されます。本セッションから新たにZone Dが加わり、フォーラムは4つのZoneで構成されることとなりました。ここでは、3日(土)「専門職として学び合うコミュニティを培う 日本の教師教育改革のための福井会議2012」で開かれるフォーラムにおける4つのZoneのねらいと報告校やシンポジウムの内容等および4日(日)「実践研究福井ラウンドテーブル2012」の概要を掲載いたします。

3/3 Sat. 12:40-17:40

専門職として学び合うコミュニティを培う

For Professional learning communities

日本の教師教育改革のための福井会議2012

Zone A 学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

／学習の展開をとらえる力

21世紀の学校教育において、教師たちはいかにしてそれぞれの自律性に基づきながら学校づくり・授業づくりを進めていくのだろうか。授業研究を中軸に据えた学校改革・授業改革の中で、教師たちは協働研究を展開し、同僚性を育み、「学習する組織」としてのコミュニティを構築しながら、いかにして子どもたちの学び合うコミュニティ、ケアし合うコミュニティを支えていくのだろうか。Zone Aでは、21世紀の学校、すなわち、知識社会のための学校づくり、さらには、知識社会を超えた学校づくりの方向性を探るために、以下3つのSession から多角的に議論を深めていきたいと考えています。Session Iでは、福井県内外の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校から、学校拠点の協働研究に関するポスター報告を行います。Session IIでは、東京大学大学院教育学研究科・准教授の藤江康彦氏、福井県教育研究所教職研修課・主任の牧田秀昭氏をお招きし、授業研究を中軸に据えた学校づくりの展開、理論的及び実践的課題について報告、意見をいただき、参加者の皆様と共に議論を深めていきます。Session IIIでは先の2つのSessionを受け、「学習する組織」の構築により学校改革・授業改革に挑戦している福井県内外の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校から協働研究の具体的な報告をしていただきます。このSessionで学校における協働研究の展開を報告いただくのは、小学校2校、中学校2校、高等学校2校、特別支援学校2校で、以下4つのフォーラムを設けて各学校の挑戦を傾聴し、議論し、共有していきます。

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 茅ヶ崎市立浜之郷小学校(神奈川) | 福井大学教育地域科学部附属小学校(福井) |
| 2 墨田区立文花中学校(東京) | 越前市武生第三中学校(福井) |
| 3 滋賀県立彦根西高等学校(滋賀) | 福井県立美方高等学校(福井) |
| 4 千葉大学教育学部附属特別支援学校(千葉) | 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校(福井) |

Zone B 教師教育：生涯にわたる専門職としての力量形成

教員の生涯にわたる力量形成という視点から、養成・採用・研修と一体になった教師教育の在り方について検討します。Session Iでは、福井県内外の大学・教員研修機関によるポスター発表を行います。Session IIでは、現在中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会基本制度ワーキンググループ座長で、十文字学園女子大学学長の横須賀薫氏をお招きし、今年3月に取りまとめられる制度案についてのご報告いただくとともに、今後の教師教育における課題を提起してい

いただきます。SessionⅢでは、SessionⅡを受けて、大学や教育委員会、学校は今後どのように取り組んでいくべきかについて具体的に探っていきます。冒頭に福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長で基本制度ワーキンググループ委員でもある松木健一から福井での取組についての報告をし、県内外の多様な教師教育関係者を交えて大学間連携・組織間連携も視野に入れた教師教育改革についての議論を行っていきます。

Zone C コミュニティ：持続可能なコミュニティをコーディネートする

「学び合うコミュニティを培う」がテーマ。地域の自治と学習の拠点である公民館を支えているみなさん・地域活動に積極的に参画している若い世代が集い、互いの実践とそれを支える営みについて語り合い、聴き合うZoneです。社会教育の担い手のための福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」・福井大学地域共生プロジェクトセンター・教育地域科学部で地域に開かれた活動・研究を展開しているメンバーが中心となって準備を進めてきました。sessionⅠでは、互いの活動をポスターを通じて共有します(2階ロビーが会場です)。sessionⅡでは大学生の地域参画を支えている早稲田大学の秋吉恵さん・北海学園大学の内田和浩さんを囲んで、主体的な活動をひらき持続的に展開していく営みとその知恵に問いを進めます。sessionⅢでは、6人程度の小グループで、互いの地域活動を紹介し合いながら「持続可能なコミュニティをコーディネートする」、その営みと意味を探ります。

Zone D 教科：教科を問い直す／なぜ学ぶのか

Zone Dは、「教科を問い直す／なぜ学ぶのか」という最も根源的な「問い」を抱き旗揚げをします。学校で学ぶ子どもたちは、固有の目標や内容を判然ともつ教科学習から、知識・技能・思考・判断・表現といった様々な学力を身に付けます。個別の教科においてに培われてきた学力は、子どもたちの成長発達を支えていく根幹として、どのように統合されてくるのでしょうか。また、子どもたちの持っている可能性をどのように引き出し高めていくのでしょうか。Zone Dでは、子どもたちが「なぜ教科を学ぶのか」という素朴な視点を大切にしながら、次の3つのSessionから教科を問い直していきたいと考えています。SessionⅠでは、福井大学教職大学院生・福井県内外の小学校・中学校・高等学校・大学の先生方によるユニークな実践のポスター報告を基にし、子どもの学びから教科を問い直す場が生まれることを期待しています。SessionⅡでは、京都大学高等教育研究開発推進センター教授の松下佳代先生をお迎えして、新しい学びの評価の在り方について話題提供していただき、そこから教科を問い直す視点を参加者の皆様と共に探っていきたくと思います。SessionⅢでは先の2つのSessionを受け、「教科で自己を問えるのか」と「教科で日常を問えるのか」という2つのテーマを掲げ、それぞれのテーマごとのフォーラムを設けて、教科の学びについて問い直しを図りたいと思います。「教科で自己を問えるのか」のテーマでは、大学教員と小学校教員のコラボ実践・美術科教員と家庭科教員による中学校における合科的実践の2つの報告を絡め合いながら、教科の存在意義を探り合います。特に、自己との関わりの中で意味を生成していく課題づくりに焦点をあてて議論を深めていきたいと思っています。「教科で日常を問えるのか」のテーマでは、福井県の授業名人を任命されているお二人の先生に授業名人に至る道筋を中心に語っていただきます。その中で、お二人の先生には、「日常に潜む問い」に迫る模擬授業も盛り込んでいただく予定です。そこで感受した学習者としてのまなざしを共有しながら、教科の存在意義を模索し合えたらと考えています。

「教科で自己を問えるのか」 湊 七雄 (福井大学) 中山俊一郎 (敦賀市立東浦小中学校)
堂下和代教諭・村中和代 (福井市至民中学校)
「教科で日常を問えるのか」 南部泰啓 (福井県立藤島高等学校) 牧井正人 (坂井市立丸岡南中学校)

3/4 San. 8:30-14:00

実践研究福井ラウンドテーブル
Spring Sessions

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語りていきたいと思っています。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中に見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。語られる展開に耳を傾け、活動の場面に共有し成長のプロセスを探っていきたくと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

Schedule

3/3 sat - 4 sun 福井ラウンドテーブル スプリングセッション

3/15 thu 平成24年度長期インターンシップ説明会

3/21 wed 平成23年度福井大学教職大学院第2回運営協議会 3/23 thu 平成23年度学位記授与式

[編集後記]

1年間という時の流れの早さをかみしめています。今号は「場」を超えた学びの広がり・深まりを感じていただける充実した内容になっているのではないのでしょうか。お忙しいなか原稿を寄せていただき、感謝しております。(HY)

教職大学院Newsletter No.39

2012.02.29発行

2012.02.29印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1